

# 八王子の民俗ノート No.2

## 横川の日吉神社の祭りと芝居

三代 綾

### 1. 横川の「オボスノサマ」として

八王子市横川町は、八王子市域のほぼ中央に位置する町である。横川の日吉神社は現在の5丁目に鎮座する神社であり、420年余り前に近江国(現在の滋賀県)の日吉大社から勧請されたといわれている。つつじヶ丘トンネルから中央道の下をくぐり抜ける道の途中を左に入ると鳥居が見える。古くから横川に住まう人々は、この日吉神社を「オボスノサマ」と呼んでいた。横川の「オボスノサマ」は、横川の土地の神という意味である。現在では横川町の1丁目から5丁目までの広範囲を守る神とされている。しかし次第に新しく移り住む住民の割合のほうが大きくなり、日吉神社の位置さえも知らない人々が増えてきた。近年では、神社階段脇に鎮座し数軒で管理するミタケサマ(御嶽様)を本物の「オボスノサマ」であると話す人も出てきているという。

今日では想像しがたいが、戦前は横川の日吉神社における祭りが大変賑やかなものであったことを、又聞きしたことがあった。今回はその祭りの実態をできるだけ多く集め、のちに引き継がれた横川祭を考える一助になればと思い、ここにまとめた。

なお、聞き書きは横川一の古老である大正11年生まれの飯田浦吉氏に始まり、昭和15年生まれまでの男女12名を対象とした。また、あきる野市二宮に存在していたとされる岡部一座については飯田氏のほか現地あきる野市の古老にも聞いた次第である。

### 2. 戦前の祭りと芝居

**1年の数少ない楽しみ** 戦前の楽しみは少なかった。さらに横川には笛や太鼓、山車、そして今日の横川祭にみられる御輿もなかった。1年の楽しみというと4月15~16日に行われた慈根寺(じごじ=元八王子)の八幡さまの祭り、21日の横川の日吉神社の祭り、富士森の花見、8月26~27日のお諏訪さまの祭り、そして10月13~15日の大善寺のお十夜の見世物やサーカスであった。なかには当時上・下に分かれていた現在の八王子まつりを観に行った人もいた。

当時の祭りの楽しみはお神楽と芝居であった。横川の日吉神社の祭りは高尾山薬王院の春季大祭に合わせ、4月21日に行われた。プログラムが決まると、回覧板で知らされた。昼間は神事と役者によるお神楽、夕方の18時頃から21時頃まで歌舞伎などの芝居があった。年齢や貧富の差を問わず親も子も集まり、横川以外の土地からも観に来る人で溢れていた。立ち見も多かった。慈根寺、諏訪、叶谷、四谷から来る人もいたが、さらに遠い西多摩郡のほうからも弁当を持って観に来た人がいたという。

**祭りをを行うということ** 昭和6(1931)年頃、日吉神社境内に横川の青年団や年番によって芝居用の舞台を作ったことが始まりであった。舞台は拝殿向かって右手に設けた。舞台に使用するヒノキの丸太は、下から山の上の日吉神社まで大八車やリヤカーで運んだ。大八車は前後に3、4人が付き、注意しながら登った。日吉神社の山は粘土質の山であるから大変よく滑るのに加え、切割りの細い道、90度に近い急

斜面であったためである。そのため丸太を1本運ぶのに30分かかり、舞台を完成させるには1週間かかった。毎回解体し、下にある公会堂(現在の3丁目の横川会館の一部)の隅にゲヤを設けて保管した。

祭りの時にはカーバイドランプの灯りがともった。のちには神社付近の家の協力により、電気の灯りを下から通した。階段沿いにはアンドンが下げられた。昭和14~5年の記憶には、階段沿いにブッチョウチンが下げられており、祭りの賑やかさを感じたという。皆が帰るまで明かりを絶やさないよう、その中のロウソクを交換する役目も青年団が担った。

**舞台と舞台裏** 舞台を組む際には縄ない機で作ったわら縄を使った。屋根にはスタレを被せ、6メートルほどの丸太を12~3本固定し、その先を赤や黄の花紙(蛇腹に折りたたんだ薄紙の中心を細い針金で括って開いた花)で飾った。舞台の前の空間はスギの葉で覆った。神社の周りはスギやヒノキの木が多かったので、舞台にはその葉や木材を用いた。舞台の大きさは間口6間×奥行4間(10.8メートル×7.27メートル)、高さは1.3メートルほどであり、腰回りには紅白の幕を使用した。4間では狭いのではないかという話もあった。ちょっとした花道も設けられた。戦前はハナ(半紙に祝儀の値段と名前を書いたもの)を貼って外に立てていた。金額は50銭・30銭・20銭などであった。

舞台の裏には役者のために仮設の楽屋と風呂が設けられていた。客席から見える所には板塀を見せたが、多くは木の杭にムシロを当て、縄で括ったもので囲った。楽屋の屋根はヨシズで覆ったが、風呂に屋根はなかった。楽屋内ではカーバイドランプの灯り(のちに2つの裸電球の灯り)の中で、化粧落としをしてまた別の化粧を施す慌ただしさがあった。1人1役ではなかったからである。風呂桶は神社付近の家に借りた。水は青年団の3~4人が山の下のパンプ井戸から汲み、山の急斜面などの状況を考え、手桶に半分くらい入れて何度か行き来して運んだ。

**露店** 露店は拝殿向かって左手に数軒並んだ。的屋が店を出した。おでん(竹串に刺した三角のこんにゃく。みそ田楽のこと)、おべった焼き(具のないお好み焼きのようなもの)、綿あめ、金太郎あめ、棒あめ(べっこう)、キャラメル、せんべい、ふがし、お面のほか、ヨーヨーなどのおもちゃがあったという。多くは1銭で買えた。このような露店は開戦直前の昭和14~5年頃にはなかったという。

**役者の手配** 青年団は役者の手配及び舞台設営を行った。婦人会は食事など役者の世話をを行った。役者は公会堂で寝泊まりしたり、大きな家の世話になったりした。松竹座と二宮を呼んでいた。「曾我の対面」などを演じたという。高額で呼ぶため、役者にはお神楽もさせた。

#### ●横浜の松竹座の場合

愛川村の座間(現在の神奈川県愛甲郡愛川町)に座元があった。事前連絡をせずに直接青年団数人が自転車で訪れ、祭りの日取りを伝え、金額などを話し合った。自転車は親のものを借りるなど、当時は貴重であった。神奈川県内に運送屋があり、衣装など一座の荷物は八八車に長持を積んで送った。一座は横浜線に乗って来た。役者は12~3人、着付けの女衆が4~5人いた。一座を呼ぶのに20円かかった。当時1円札は最高であった。

#### ●あきる野の二宮(栗沢一座、岡部一座)の場合

横川に来たのは栗沢一座と岡部一座の2座であった。古谷一座から分派した栗沢一座は、新派芝居と歌舞伎の両方ができた。古谷一座は横川には来なかった。岡部一座には「岡部軍曹」と呼ばれる座長がいた。実際に軍曹であったか否かは定かではないが、そのように呼ばれていた。あきる野市二宮の古老

によると、岡部一座は一座というほどのものではなかったが集団が存在し、大正5年生の2代目市川増三郎(栗沢一座の3代目栗沢一雄)氏が座長を務める栗沢一座に出入りしていたという。

二宮の役者は普段は百姓などであり、芝居好きの人々で構成されていた。役者が自ら道具を持参した。松竹座と同じ招き方であったが、一座は徒歩で来た。一座を呼ぶのに10円～12円で10人ほど来た。水無瀬橋を渡った先にある日吉町に鎮座する日吉八王子神社でも演じていた。

**こぼれ話** かつらに用いるツバキ油1～2つを中町で買ってきた。役者はツバキ油が余ると持って帰るのが楽しみのものであった。結局は役者全員に配ることとなり、予算がだいぶ狂ったこともあった。

**青年団・年番と祭り** 年番は1年交代であった。時代により軒数は異なるが、水無瀬橋のほうから順に下横川(下横川・下横川中組・下横川上組の3つに分かれていた)、中横川、上横川のそれぞれから7～8軒ほどが当たった。年番の役割はヒノバン(夜回りとも。火の用心)、不幸の時の手伝い、横川の日吉神社の祭りの手伝いなどであった。ヒノバンは20歳以上の男女問わず8軒ほどで回った。12月21日から30日までの夜の10時・12時・3時の計3回行い、しんどかったという。戦後には札配りと餅搗きを4～5人で行い、1升のもち米を搗いて二つ重ねの餅(=お供え)を作って神社に供えたこともあった。現在年番はなくなったが、祭り実行委員会が組織され、各町会の組で仕事の担当を分けるようになった。ヒノバンも回数を減らし、町内会の組で続けられている。

横川の青年団は男女ともに役を担った。しかし合わせて20人やっとの人数であった。日吉神社の祭りの主動であり、普段は畑の手伝いなども行った。青年団が無くなってからは、有志として祭りの日に合わせて横川各地で芝居を企画した。青年団自らが素人芝居を行ったこともあった。

**お参りとワラビ採り** お参りは1月1日の元旦、お宮参り、七五三、暮れと春の境内の掃除のときに行う。商売をしている人は現在もこれ以外に毎月1日と19日(月初めと半ば)にお参りしている。危機一髪で難を逃れた経験のある人々は特に「オボスノサマ」を大切に思っているという。

また神社の入り口付近にはワラビが採れた。子どもの時によく採りに行った。ワラビは灰で1日かけて灰汁抜きした後、洗って醤油で煮て食べた。現在は採れなくなった。

### 3. 戦後の祭りと芝居

**日吉神社から下りてきて** 開戦後の昭和18年頃には日吉神社の境内から芝居が消えたという。戦後も舞台の骨組みは公会堂(現：横川会館)に保管していた。この木材を使い、日吉神社の祭りの日に合わせ、場所を変えて何年かに一度芝居が行われた。戦後は芝居などの娯楽は禁止といわれていたが、回数を減らしながらも続けられた。昼間は境内で神事を執り行い、夕方からは戦前と同様に芝居がなされた。この流れが昭和30年代半ば頃まで続いたのも主に青年団の有志によるものであった。なかには祭りの日には別に横川の人による素人芝居が行われることもあり、役者も観る人も楽しんだ。しかし舞台の骨組みは昭和45年の公会堂建て替えとともになくなり、青年団有志も時代の流れとともに解散した。

#### ●下横川(1箇所)

水無瀬橋の近くの土地で1～2回行われた。横川と隣接する元本郷にあった千鳥新太郎一座を一晩だけ呼んだ。15～6人で来た。千鳥新太郎は二宮と同様、日吉八王子神社でも演じていた。

#### ●中横川(3箇所)

桑畑の跡地で一度だけ中横川の人による芝居が行われた。お姫様や刀で斬る役などがあった。16～7

人が役者や裏方を務めた。また別の麦畑の所で二宮の役者を7~8人呼んだ。大きな家の土地でもチャンバラの芝居を中横川の人や青年団有志が行ったことがあった。

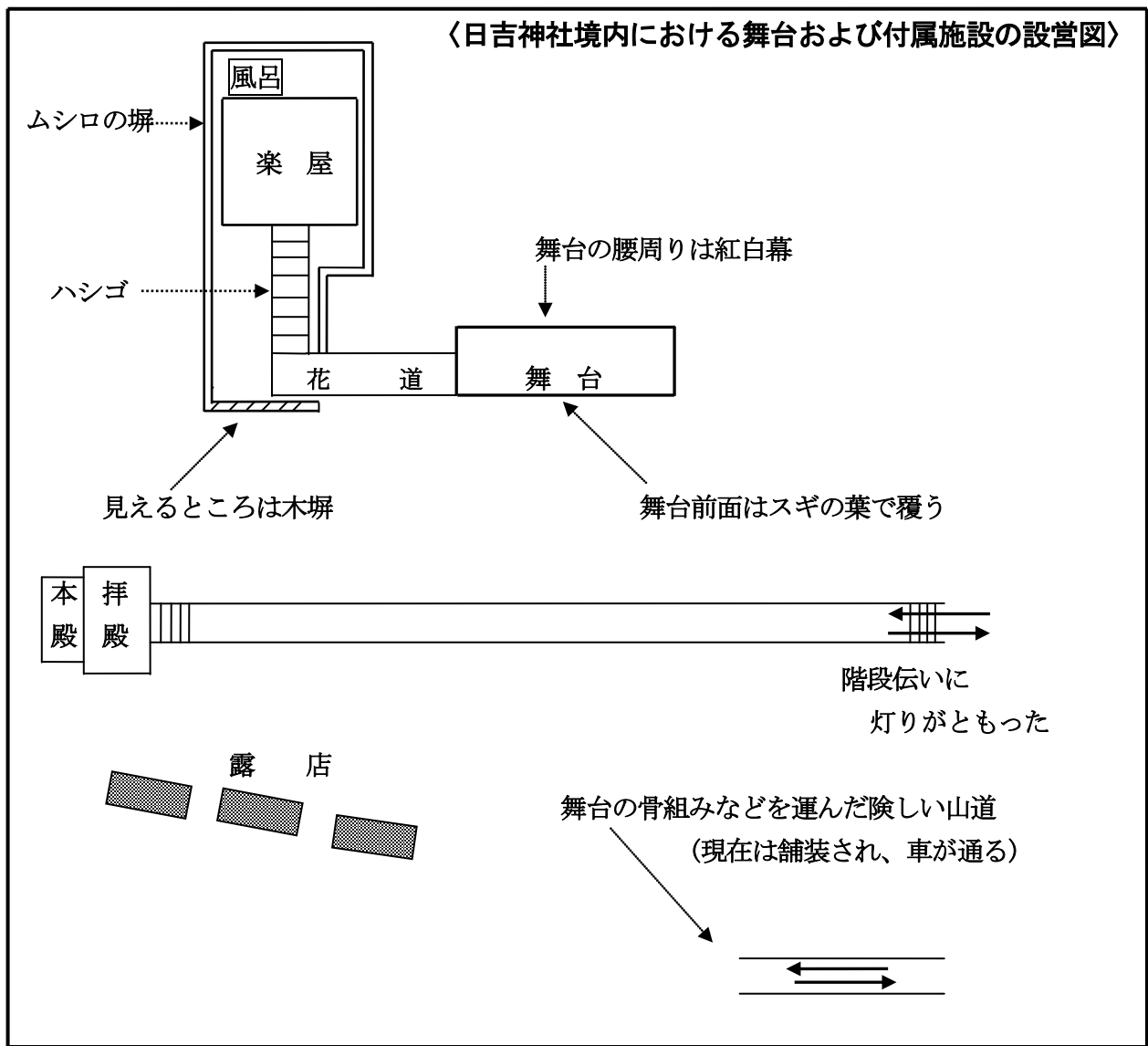
●上横川(2箇所)

大きな家の土地で行った。下横川と場所を変えて、何年かにどちらか一方で芝居が行われたことがあった。昭和34~5年の頃、上横川で役者を呼んだのが最後であった。

「オボスノサマ」の祭り—横川祭として 横川祭は平成25(2013)年で29回目を迎えた。1日目に神事が行われ、2日目に2基の子供会の御輿が巡る2日間の祭りである。神事については戦前から代表者のみの参列であったにも関わらず、横川に住む人々にとって「オボスノサマ」の祭りは確かに年中行事の1つであった。神社への信仰心もあったが、それ以上に当時流行した娯楽である芝居やお神楽があったたからであるという。

戦時中こそ途切れてしまったものの、戦前から戦後にかけての芝居やお神楽を伴った「オボスノサマ」の祭りはほぼ30年続いた。来年、横川祭は30回目という節目を迎える。新たな横川祭として30年続くような多くの人々の楽しみというものを、横川の土地の神としても熱望しているのではないだろうか。

(みしろ あや 民俗部会 専門調査員)



# おじいちゃんのお稲荷さん(八王子市上野町)

秋山 和英

私の実家は、市内上野町にある昭和10年に創業した3代で約80年に渡る工務店である。「お前のおじいちゃん、職人だなあ」小学校の帰り道、遊びに来た友達が祖父を見て、そうつぶやいた。「シュッ、シュッ、シュッ・・・」およそ30年前、小学校から帰ると決まって家から聞こえてくる音だ。縁側で祖父がひとり、脇目も振らずノミで材木を削っている。なんとも心地良い音色で、今でも心に響いてくる。

祖父は当時、愛知県豊川市にある豊川稲荷に参拝する仲間「豊川講」に属しており、工務店を営んでいる関係上、商売繁盛の神様として「お稲荷さん」を信仰していた。そして、趣味が高じてお稲荷さんの祠を手作りしたという。

なぜだかこの辺りは初午よりも二の午を重視していて、思い返すと二の午がやってくると、子供の私は、赤・白・紫・黄・緑など、色鮮やかな紙が連なった半紙のようなものに文字を書かされたものだ。

「豊川吒枳尼眞天(とよかわだきにしんてん)」呪文のようなこの文字群、豊川稲荷に祀られている鎮守だそう。この難解な文字を書くのは面倒で、イヤな思いが強かったが、その一方で二の午は、お菓子をもらえることが嬉しかった。茶色の紙袋に詰まったお菓子は、遠足に持っていく量をはるかに凌ぎ、とても楽しみだった。いまはもう無くなってしまったが、八日町から南新町あたりにあった料亭、たしか登喜和と名を記憶しているが、もらうお菓子は格別で、行列ができていたのを今でも覚えている。

「お前のおじいちゃん、職人だなあ」

あれから30年、祖父は亡くなってしまったが、実家の玄関には立派なお稲荷さんが鎮座している。魚介などの生ものがダメなお稲荷さん、毎年2月の二の午は、いなり寿司とりのり巻き、赤飯を用意して両親が私たち家族を待っている。子供の頃を懐かしみ、今年もまた、お稲荷さんに手を合わせた。

(あきやま かずひで 市史編さん室主査)

\*\*\*\*\*

## 市内浅川地区の行政区画の変遷

明治以降の行政区画の変遷は、なかなか理解しがたい。とくに新たに八王子市に住むことになった市民にとってはなおさらである。そこで、本年度民俗調査を行っている浅川地区を主として八王子市の行政区画の変遷を下記にまとめてみた。文献は、『八王子市史』附編1968、縣敏夫『八王子市旧浅川町の石仏と地誌』2013を主に参照させていただいた。

江戸時代 浅川地区は、上長房(かみながぶさ)村と上栲田(かみくぬぎだ)村の2か村で、代官所支配  
慶応 4(明治元年)年(1868) 府藩県制を実施

八王子市域は全域が天領 旧江川太郎左衛門代官所支配地 → 蕪山県

旧旗本領 → 品川県

高家領・寺社領 → 旧領のまま

明治 元年(1868)12月28日 蕪山県と品川県のすべてを旧神奈川県に統一した 旧領のままの村も有り

明治 2年(1869)6月の版籍奉還により、翌年の明治3年7月に、高家領及び寺社領が神奈川県になる

- 明治 4年(1871) 4月 太政官布告で戸籍法を制定  
神奈川県内を「区」に区分し、区の下各村に戸長を置く
- 明治 4年(1871) 7月 政府は廃藩置県令を施行、府藩県制を廃し、全国を3府1道72県に区分する
- 明治 5年(1872) 2月 下恩方村、小津村などの入間県管轄が、神奈川県に配属される
- 明治 5年(1872) 戸籍法を実施 4月に名主や年寄を廃止し、戸長、副戸長を置く  
10月 大区小区制を実施
- 明治 6年(1873) 5月 管内区画の改正 戸籍区を廃し、行政区画として区番組制を施行  
浅川地区は、第9区11番組 区は郡を分割し、番組は2か村以上を合併
- 明治 7年(1874) 6月 区番組制を大小区制に改正 第○大区第○小区と改称  
大区に正副区長、小区に正副戸長を置く
- 明治 8年(1875) 『神奈川県管下職員録』より  
第十一小区上栲田村 戸長 鈴木竜溪 副戸長 井上尚良 書役 山口周三郎  
上栲田村用 栗原喜三郎 上長房同 鈴木藤右エ門 同同 岸兵四郎
- 明治 9年(1876) 10月 村に総代を置く
- 明治 11年(1878) 7月 太政官布告で郡区町村編成法を制定 大区小区制は廃止 郡-村 戸長を置く  
大区を郡に、小区を町村に再分合させ、町村名には江戸時代の呼称を用いる  
浅川地区は、南多摩郡上長房村、南多摩郡上栲田村  
「横山宿」となり、「八王子」の名称が消えて大問題となる 「八王子派」と「横山派」の対立がおこる 明治12年に「横山宿」から「八王子駅」となる
- 明治 15年(1882) 7月 町村の分合を実施 旧15宿と元横山村、新横山村、子安村が合併して八王子となる  
同名の村名には、東・西・南・北などの名を正式につけた
- 明治 17年(1884) 7月 村ごとに置かれていた戸長と戸長役場を廃止し、新たに連合戸長役場と連合戸長が置かれた 浅川地区は、上長房村に戸長役場(上長房村 上栲田村)
- 明治 17年(1884) 『神奈川県戸長職員録』より  
准十七等官 年俸百二十円 戸長 峯尾與十郎 役場位置 上長房村 村数二ヶ村 戸数六九 上長房村 上栲田村
- 明治 22年(1889) 9月 市制町村制の施行  
八王子市域には、八王子町、由井村、横山村、浅川村、元八王子村、恩方村、川口村、加住村、小宮村、由木村 の1町9か村が成立する
- 明治 26年(1893) 北多摩郡、西多摩郡、南多摩郡の三多摩全域が、東京府(昭和18年に東京都制)に移管される  
神奈川県南多摩郡浅川村から、東京府南多摩郡浅川村となる
- 大正 6年(1917) 9月1日 八王子町が市制を施行し、八王子市となる
- 昭和 16年(1941) 10月1日 小宮町(昭和9年町制)が、八王子市に合併
- 昭和 30年(1955) 4月1日 横山村、元八王子村、恩方村、川口村、加住村、由井村の6か村が八王子市に合併
- 昭和 34年(1959) 4月1日 浅川町(昭和2年町制)が、八王子市に合併  
八王子市東浅川町、西浅川町、高尾町、南浅川町、裏高尾町、初沢町
- 昭和 39年(1964) 8月1日 由木村が、八王子市に合併 (専門管理官 佐藤 広)

## <前号『八王子の民俗ノート』No.1 掲載の「八王子の酪農について」追記>

井草甫三郎に関する下記の2つの文献を追加します。なお、小泉栄一『多摩の丘かげ ニュータウン以前』に収録されている「井草甫三郎翁」の掲載に際しては、小泉秀夫氏の御了解をいただきました。この文献は、井草家からご教示いただきました。心からお礼申しあげます。

### 小泉栄一『多摩の丘かげ ニュータウン以前』八王子ふだん記全国グループ 1970

「井草甫三郎翁 井草甫三郎翁は、背のスラリとした鼻の高い上品なおじいさんであった。私が青年学校の生徒の時である。小学校の講堂に夜、在校の青年学校生徒を集め、森永ミルクキャラメルの創始者、森永太郎翁を井草さんが連れて来て、その生い立ち等の講演を聞かせてくれた。キリスト教の信者である森永翁が、聖書の一節を幟にでかでかと書いて押し立て、東京の町中でキャラメルを売り歩いた話などしてくれた。その時井草さんをわたしは初めて見たのであった。いやそれまでも見ていたのであろうが、誰からもあの方が井草さんだと、教えて貰えなかった。

ただ井草さんの噂や話は少年のころから知っていた。昭和二十七年、読売新聞八王子支局で発行した『郷土を築いた人たち』の『酪農の開祖井草甫三郎』の中に、明治末年に若い郡長内山田三郎氏の肝いりで故萩原島次郎（堺村小山）池田堅次郎（忠生村根岸）横田竹次郎（南村小川）氏等と乳価維持のため南多摩乳牛組合を創り、一時は西多摩十ヶ村も傘下におさめていた。とあるが、その中の萩原島次郎はわたしの祖父鬼子十郎の実弟で、小山、御岳堂へ婿に入った人で、わたしの家では「御岳堂の叔父さん」といった。その御岳堂の叔父さんがわたしの家の火地路端で両親といろいろの話をしているのを聞いていると、井草さんの話がよく出た。松木の井草さんへ行った帰りだとか、北海道へ井草さんと牛の買い付けに行ってきたとかである。又小学校の受持であった大滝不二郎先生から雑誌キングに「乳牛王井草甫三郎」の伝記が載っている話や、井草家の牧場へ牛の写生につれて行って貰ったりはしていたのである。けれど本物の井草さんはそれまで遂ぞ見たことはなかった。

わたしが井草さんの顔を覚えたころ、御岳堂の叔父さんは、「井草さんの銅像を俺が目の黒い中、作ってやらなければならない」と、よくくり返していた。銅像になる位の人だからどんなに偉い人なのだろうと、青年のわたしは思っていた。全身の銅像にはならなかったらしいが、胸像は八王子の子安にある乳牛組合の事務所あたりに出来たらしい。

井草さんの家は多摩ではきっての名家で、昭和の初め頃、都下で早稲田大学の同窓会を開くと、その半数は井草家親類の子弟で占めると新聞の記事に載っていたことを覚えている。各町村の豪家、旧家といわれる家には、皆何かのひっかけりがあったらしい。その家柄は、豊島泰経の後裔だそうで、太田道灌に攻略された泰経は、三宝寺カ池とかに身を沈めた伝説は有名であるが、その一族が上州小幡に落ちのび、後上州井草に移住、そして又由木の松木に引越して来たという。それで家名を「小幡家（おばたけ）」と呼び、姓を井草としたのだそうだ。天正十八年、八王子城陥落の悲劇の勇将、中山勘解由家範の二子を、その親戚の故をもってかくまい、その一子を後日徳川水戸の筆頭家老にまでさせたのも井草家であるとか。

井草さんの菩提寺は井草家の祖先の開基であるので、代々の法号には「院殿」を贈られるが、歴代中一番の傑物井草甫三郎の遺言に、爾今、井草家は「院殿」の称号を廃す。があった由。この話をわたしの部落一番の旧家の旦那様故大塚善作さんから聞いた時、やはり常人とは違った偉い人なのだと思った。

井草さんは明治二十五年ホルスタインの乳牛一頭を、井草さんが購入したのだが、三多摩の酪農王国を築く出発点であったという。その頃らしいがわたしの部落鑑水に「乳屋」という家名をもった豪家があって、自家製の牛乳を売り出していた話を聞いた。大正年代まで乳牛をやっていて、その頃の牛乳瓶は今の清酒の首の長い一合瓶のような形で瀬戸物製の栓がその口辺に太い針金でついていた。それがわたしの屋敷のまわりによく本も長いこと転がっていた。きっと井草さんの家でも最初の中は、個人経営の乳屋であったものだろう。今、毎朝門口に配達される牛乳を手にとると、村の先覚者井草さんの面影をふと思い出す」

『由木村郷土資料』由木西小社会科研究部 1959年11月3日

「十 人物小伝 井草甫三郎翁 今日の『酪農三多摩』の基礎となった牛乳の導入に貢献した人に、井草甫三郎氏の名をあげなければならない。翁は、東京立志塾で村田直景に師事し、農村経営の法を学んでから窮乏な農村の振興には、『酪農経営』との信念をかため、明治二十五年先進酪農地帯であった千葉県房州地方を視察し、ホルスタイン種牝牛一頭を買い込んだのが都下最初の乳牛であった。

その後北海道にわたり酪農経営を視察するなど乳牛飼育と乳牛販売事業に一身に身を捧げ明治末年には、東多摩乳牛組合を創り一時は西多摩十ヶ町村を傘下におさめていた。当時翁の生家の小牧場には二十五頭の乳業が飼育されていたという。

明治二十五年（←昭和 25 年が正 編者注）四月十五日には、酪農村由木の発展と牛の魂祭りをかねた『牛魂碑』が当村堀之内日蓮堂に建立され碑文は是非翁にと村人に依頼され、これが翁の絶筆ともなった。

この利にさとい農民の心に如何に酪農経営が得であるかということは、当村の現状が如実に物語っている。翁こそ酪農三多摩を築きあげたその人であるといっても過言ではない。（参考書 郷土を築きあげた人）」（←『郷土を築いた人たち』読売新聞八王子支局 1952 が正しいと思われる 編者注

\*\*\*\*\*

## 【書籍紹介】 民俗関係を主に

○縣敏夫編著『八王子市旧浅川町の石仏と地誌』2013年3月1日 私家版 194 ページ

目次 旧浅川町の歴史地理／1（大字） 栲田地区の地誌と石仏 （1）上栲田・字新地の成立ち（東浅川町・新地）①新地の石仏銘（2）上栲田・字三田の成立ち（東浅川町・三田）興福寺・設楽代官の墓所 ②三田の石仏銘 興福寺千人頭河野・中村家墓所全銘 千人同心関係の墓所（3）大字上栲田・字原宿の成立ち（東浅川町・原宿）③原宿の石仏銘（4）大字上栲田・字原の成立ち（東浅川町・原宿）④原の石仏銘 2川原之宿の地誌と石仏（1）初沢・川原之宿の成立ち ⑤初沢の石仏銘 ⑥川原之宿の石仏銘（2）高乗寺の成立ち 高乗寺の石仏銘 千人頭窪田家の全墓塔銘・代官深谷家の墓塔銘 3案内地区の地誌と石仏（1）落合の成立ち（高尾町・落合）⑦落合地区の石仏銘（2）字坊ヶ谷戸（高尾町）字込縄（南浅川町）の成立ち ⑧坊ヶ谷戸地区の石仏銘 ⑨込縄地区の石仏銘（3）高尾山の成立ち（高尾町）高尾山の八十八大師（4）案内の成立ち（南浅川町）⑩梅ノ木平地区の石仏銘 ⑪欠⑫山下地区の石仏銘・⑬入澤地区の石仏群 ⑭中澤地区の石仏銘・⑮小柏木地区の石仏銘 ⑯大平地区の石仏銘 4上長房地区の地誌と石仏（1）小名路の成立ち（西浅川町）⑰小名路地区の石仏銘（2）駒木野の成立ち（西浅川町）⑱駒木野地区の石仏銘（3）荒井の成立ち（西浅川町）⑲荒井地区の石仏銘（4）摺指の成立ち（西浅川町）⑳摺指地区の石仏銘（5）小仏の成立ち（西浅川町）㉑小仏地区の石仏銘 参考文献 あとがき



○八王子市川口郷土史研究会『郷土史』第34号 平成25年2月5日発行 /年刊

「どんど焼き」会長 車田勝彦

「平成二十四年総会・新年会 八王子のむかし話を聴く」常任幹事 瀬沼秀雄

「八王子大善寺の「お十夜」が復活 一八王子城落城の戦死者の慰霊が始まりー」山本 仁

「聞書 川口・少し昔の暮らし その5 獅子舞と塞の神ー久保喜一さん」聞き手・岡村繁雄

○川口地区の今写真集 2012 編集員会『川口地区の今 写真集 2012』八王子市・川口地区町会自治会連合会

206 ページ オールカラー/I 自然 川の部 山の部 台地の部 谷戸の部 公園の部 道路の部 古道の部 樹木の部 野草の部 昆虫の部 野鳥の部 両生類の部 景色の部 II 歴史 寺院の部 神社の部 名所旧跡の部 観音堂などの部 石仏などの部 芸能・遺物の部 遺跡・出土の部 III 町会・自治会 IV 学校・公共施設 学校の部 公共施設の部 索引 参考文献 世帯数及び人口 川口地区町会自治会連合会役員 「川口地区の今写真集 2012」編集委員 編集後記 ※各写真には丁寧な説明が付けられている。

\*\*\*\*\*

市制 100 周年記念事業

平成 28 年 (2016) 度まで

八王子市市史編さん

## 民俗調査のお願い

八王子市は、大正 6 年 (1917) に市制を施行しました。そこで、市制 100 周年記念事業として『新八王子市史』の編さんをすすめています。将来の八王子市を展望するためには、先人の残した貴重な資料を保存し、活用できる環境を整備する必要があります。

今日、八王子市は大きく変貌しています。そこで、市内の伝統的な生活文化を聞き取り、文字で記録して後世に残すため、八王子市市史編集専門部会の民俗部会で地域の民俗調査を実施しています。何卒、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

### ◆民俗調査の内容◆

地域に伝わる次のような伝統的な生活文化を調べます

1. **社会生活** 地域の範囲と区分、家数の変化、町会活動、親分子分、共同の仕事、屋号、こども組、冠婚葬祭、青年団、消防団、コミュニティ活動など
2. **生産・生業** 農作業、山・田・畑の仕事、目籠作り、養蚕、機織、畜産、職人などの生業
3. **住まいと環境** 民家、集落の立地と屋敷、水の利用、カマド、ヒジロ、風呂、便所のことなど
4. **衣食をめぐる暮らし** 衣料の調達、仕事着、ふだん着、食料の調達、食事の仕方、主食、副食、間食、調味料、茶と酒、行事の食べ物など
5. **年中行事** 正月の準備、正月、春・夏・秋・冬の行事など
6. **人生儀礼** 誕生と育児、結婚と結婚式、葬式、墓制など



上恩方町での聞き取り調査 (平成 22 年)

7. **寺社と民間信仰** 寺院について（歴史・住職・寺の行事、檀家・墓地・葬儀・境内の神仏など）、氏神と氏子、神職、お日待ち、講、地域や家々で祀る神仏、民間信仰など
8. **民俗芸能** 獅子舞、盆踊り、娯楽・芸能、子供の遊びなど
9. **口承文芸** 昔の話、伝説、世間話、俗信、わらべうた、民謡など

### ◆暮らしの写真調査◆

八王子市市史編集専門部会民俗部会では上記の聞き取り調査のほか、昭和30年代ころ撮影の、むかしからの暮らしぶりを写した写真を集めています。また、その写真に関する聞き取り調査も行います。

これらの調査のために、市史編さんにかかわっている研究者や、市史編さん室の職員が、みなさまのお宅にお伺いする場合があります。ぜひご協力をお願いいたします。もしご不明な点がある場合には、お手数ですが市史編さん室にご一報ください。

### ◆八王子市市史編集専門部会民俗部会のメンバー◆

- |           |                  |                                   |
|-----------|------------------|-----------------------------------|
| 1. 部会長    | 小川 直之（おがわ なおゆき）  | 國學院大學教授                           |
| 2. 副部会長   | 津山 正幹（つやま せいかん）  | 八王子市文化財保護審議会委員                    |
| 3. 部会委員   | 小野寺 節子（おのでら せつこ） | 國學院大學兼任講師・<br>東京都文化財保護審議会委員       |
| 4. 部会委員   | 加藤 隆志（かとう たかし）   | 相模原市立博物館学芸員                       |
| 5. 部会委員   | 入江 英弥（いりえ ひでや）   | 國學院大學兼任講師                         |
| 6. 部会委員   | 宮本 八恵子（みやもと やえこ） | 日本民具学会会員                          |
| 7. 専門調査員  | 大藪 裕子（おおやぶ ゆうこ）  | 東村山ふるさと歴史館学芸員                     |
| 8. 専門調査員  | 神 かほり（じん かほり）    | 日本民具学会会員                          |
| 9. 専門調査員  | 美甘 由紀子（みかも ゆきこ）  | 八王子市郷土資料館学芸員                      |
| 10. 専門調査員 | 乾 賢太郎（いぬい けんたろう） | パルテノン多摩歴史ミュージアム学芸員                |
| 11. 専門調査員 | 高久 舞（たかひさ まい）    | 國學院大學研究開発機構研究開発推進<br>センター ポスドク研究員 |
| 12. 専門調査員 | 三代 綾（みしろ あや）     | 國學院大學大学院生                         |

このほか、八王子市市史編さん室の職員が調査協力をお願いしたり、行事を拝見させていただいたり、資料を拝借しに伺ったりすることもございます。

#### <問い合わせ先>八王子市総合政策部 **市史編さん室**

〒193-0943 八王子市寺田町1455番地3

電話 042-666-1511 / FAX 042-666-1512

E-mail b015200@city.hachioji.tokyo.jp

ホームページ <http://www.city.hachioji.tokyo.jp/seisaku/13570/index.html>